

・ラカンの態度はストア派のものの反対でした。よろしい。冗談はこれくらいにしましょう。

私にとっても非常に意外だったのは、レヴィ=ストロースがラカンに書いた手紙でした。もちろん、ふたりが友達だったのは知っていましたし、ずっとそうだったのも知っていましたが。

私が夕飯時にラカンの家に着くと、レヴィ=ストロースがいて、特別に自分のための料理をしていました。というのは「食べられるもの」と「食べるべきもの」について、彼はとても厳格な要求をもっていたからです。ですから私はふたりが友達であると知っていました。ラカンが田舎に別荘を買おうと探していて、あちこちパリ近郊を走り回っていた時ですら、しばしばレヴィ=ストロースはラカンと一緒にいましたよ。あれは50年代のことです。

しかし私がレヴィ=ストロースと会ったときは、彼はとても威厳があって、あまり多くを語らず、ふらふらしている様子もありませんでした。手紙を見て驚いたのは、彼がラカンに対して持っている情愛の深さです。賞賛ですね。というのも、彼は言ったのです、「自分はドクター・ラカンほど多くの物事を知っている人に会ったことは、決してない」と。それは私を驚かせました。というのは彼はジョルジュ・デュメジルをよく知っているからです。デュメジルは知の鉱脈なのですよ。

ですからレヴィ=ストロースはラカンを高い所に置いていました。しかし私の胸を打ったのは、情愛です。賞賛以上のものです。それはとても情愛の深い人物であるという印象を与えないようなレヴィ=ストロースがもつ、情愛ですね。

前のあなたの最初の質問に戻るなら、私はスペイン語の本の制作を生みだしました。ラカンはラテンアメリカにおいてはスペインと同じく、とても存在感を放っています。それで私は一冊の本を生みだしました。それはLacan Hispanoという名で出版されました。アレクサンドラ・グラズ編集者と一緒に、私はその原作をもっています。彼女は素晴らしい働きを見せてくれて、この本を世に出しました。特徴としては、ラカンをそこで注文しない、ラカン redivus みたいに注文しないなどがあります。

そうではなくて、ひとはスペイン語の著者たちに概念と数学を使うことを求めています。ラカンについてひとが語るように、です。スペインの偉大な人物、作家や画家、音楽家など、ラカンの概念を作家たちの治療に使うように、と。ラカン redivus とは区別されるものですが、私はとても好きな本で、スペイン語圏では出回っていますよ。

よろしい。さて今、私は気晴らしや打ち明け話をしましたが、あなたの望みに答えることにして、臨床におけるラカンという、真面目な質問を取り上げてみましょう。では、「患者提示」について、まずそれがどのようなものを思い起こさないとなりませんよね。

この番組を見ている方々は、こう思っているでしょう。ひとりの実践家がいる。病院やその外で、その実践家はひとりの患者との対話をするが、その場に聴衆を入れて実施するものが「症例提示」である、と。続いて、聴衆のまえでコメントがなされる。聴衆にはほかの実践家たち、例えば看護師、さらには招かれた人がいて、いくつかの臨床上のコメントがなされる。これは教育のひとつの方法である、と。こんなふうに使われていると思います。

ラカンについては特別です。私は臨床家としての養成はなくて、哲学科で養成されています。そして古典的な臨床の基礎は、大量に本を読むことにより補いました。同時に、ラカンの「患者提示」のおかげで基礎を学んだのです。「患者提示」はサン・タンヌ病院で2週間ごとに行われていました。定期的に実施されていて、ラカンはこの出会いを休みませんでした。50人ほどの人たちがいて、セミナーとは完全に異なるスタイルで行われていました。

セミナーでは、彼の存在感というのが空間全体を占めていますが、患者提示ではラカンは慎ましく、大変他者に注意を払っており、こう言ってよければ精神分析的次元の、聴き取りの授業を行っていました。あなたはマダム・ボアイエの提示で彼がしたコメントに注意を促していましたよね。ボアイエと呼ばれているマダム、あだ名ですが、本当の名前を言わないためのしきたりです。

ラカンがしたコメントは、私にとって大変大きな重要性があり、私を書いたテキストの軸です。「患者提示の教育」です。そこには、私自身が学んだことを書いています。

ラカンのコメントから、私が受け持つところの病についてのあらゆる理論を私は練り上げたのです。ラカンはじつは、病からメンタルまで、パラフレニー（妄想を主な症状とする精神病）から作りしました。ここで彼がパラフレニーと呼ぶものは、「卓越したところの病」のことで、つまり彼にとり、メンタルとはひとつの病だということです。メンタル自体、それ自体により漂っています。ある種の「すべり」があり、想像的次元のもので、想像の *imaginatif*、とか、想像のパラフレニーといったことばは、ラカンの発明ではありません。クレペリンのことばです。

ラカンはクレランボーより前にクレペリンを読んだのかどうか分かりません。私はクレランボーを読んでいませんし。でもクレペリンを読みましたが彼はこの言葉を使っています。

それはまさに病気とはメンタルの本質そのものだろうから、なのですし、このメンタルの病、それは想像界に捧げられた存在から来るのです。想像界はつねに弱まったりもするものですが。主体は象徴界、シニフィアンにしがみつかなければならなかったりする、それはひとつの次元、一貫性を固定するためにです。そして現実界、ラカンの第3のカテゴリーですが、その定義において、不変のもので、不透明です。それは想像界とも象徴界とも同時に区別されるものです。

ラカンにとって、じつはマダム・ボワイエから理解できるのは、彼が重要とするのは、それは「前臨床的な状態」、です、こう言ってよければ。ラカンはまさにそう言っているのですが、典型的なこのころの病が問題になっているのは安心なことなのです。

典型的、というのが価値を非常に持っているのです。何故ならまさに、臨床は典型＝類型で区別され定義されるからです。だからこそ典型的なこのころの病、つまりそれが結晶化しているであろうことは、とても安心なことなのです。

ラカンが言うように、誰もボワイエ夫人の病気を結晶化させることに成功しませんでした。彼女は重要な人物たちに関わりがあって、彼らに同一化していました。しかし、彼女はたったひとつの同一化だけに留まることは、決してありませんでした。

彼女は至るところに「すべりこみ」続けて、本当のことを言えば症状の典型は存在しませんでした。主のシニフィアン、つまりこう言ってよければ、ある主体のメンタルと一緒にささえるもの、その典型は存在しませんでした。

よろしい。脱病理化を喚起するために、いくつかの事柄をとばしましょう。「脱病理化」とは、ある主体の状態を参照することにあります。私たちはみな同じなのです。私たちは、みな、基本的な、前臨床的状态を持っており、私たちがこのころの病を固定するモードによってそれを区別しています。それは精神病として固定されるかもしれないし、神経症として、倒錯として固定されるのかもしれない。しかし根源的に言えば、精神薄弱を前にするとみんな同じです。というのは、ラカンがのちに述べた、ある一語にその十全な価値を私は与えたのですが、それを理解したと私は思っているからです。それは大事ではないと見做せるようなお喋りのなかにあり、私はその反対に、ラカ

ンの教育の主要な線のなかにいるのだと思いました。それはラカンの、「すべての人は狂っている」、「すべての人は妄想する」、という言葉です。それは同じインスピレーションで、実際、ラカンの脱病理化と言えるものです。

つまり臨床にたいする、ある諦めです。臨床よりも深くに、主体の原初的なあの状態が存在するとあなたは見做しています。臨床家はそれがなんであるのかを知っています。

臨床家とは、こころの病と症状の類型論についての経験を持っている者のことです。そしてラカンがここでパラフレニーと呼ぶものの経験についても同じです。

ですからそれは臨床家にその経験を許可するもので、長い期間をかけてたくさんの症例をみたという事実、そのおかげで、いくつかの特徴から出発して、何が問題になっているのかを先取りして掴むことができるのです。そんなふうにして、私たちはコントロールをします。精神分析ではそう呼んでいますが、養成中のひとが、もし望めばですが、ひとつの症例をあなたに提示しにきて、いくつかの特徴から出発して、あなたはその人に進めなさいと許可します。なぜならあなたはそれらの特徴から先取りすることができるからです。

そんなふうには読まなければならないのです。ラカンの症例呈示というのはそんなふうでした。このような症状がパラフレニーの輪郭をはっきりさせるものにおいて存在しているのかどうか確かめるために、ラカンが質問をしていた時が見られたものです。パラフレニー、これはひとつの用語ですが、もうあまり使われていない、本当に捨てられたと思います。 （4につづく）